

兵器少女 マキナ☆マギカ

那由多 ユラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

宇宙最後の発明品は星を超え、宇宙を超えて終幕を観測する。その名はデウス・エクス・マキナ。宇宙船型の望遠鏡兼データベースと意思持つ不定形の超兵器は魔法少女が闊歩する地球を正しい終わりへと導く。…きつと。多分。

0  
0  
0  
0  
0  
0  
0  
1

目  
次

1

00000001

09658999——宇宙の崩壊を確認。別宇宙へ移動を開始。

09659000——別宇宙への移動、完了。探索を開始。

00000000——前宇宙との相違点を多数確認。記録を別フォルダに保存。

00008556——知的生命体の発生を確認。観測を開始する。

00008557——知的生命体を『ハサ』と仮称。住まう惑星を

『ハサカ』と仮称。

00009003——ハサカに惑星外の生命体が接触。

00009058——謎のエネルギーを察知。透過観測機を投下し近距離での観測を計画。『マキナ』応答願う。

00009059——了承。しかし、最低限の安全確認を行うまでは送れない。

00000000——『マキナ』へ情報を送信。

00000000——『マキナ』の行き先を『日本』に指定。理由は別記。

00000000——必要と思われる言語、日本語を送信。

00000000——当機が必要と判断し『マキナ』に感情を送信…失敗。『マキナ』は既に感情を所持。

00000000『マキナ』の機能、機構を調整……終了。『マキナ』は前宇宙と同様の活動が可能。

00009060——謎のエネルギーのひとつのおおよその概要が判明。名称を『魔力』それを用いて『魔法』が発生。

00009061——『マキナ』の外皮を再構成。モデルは未成熟な頃の『マキナ』を流用。

銀髪のポニーテール、青色の眼。  
十代前半の少女の平均的な身長、体格。  
戦闘や隠密行動に適したシャツにパンツ。

00009062——惑星外の生命体に関する情報を入手。『マキナ』に送信する。

名称を『インキュベーター』日本語で孵卵器を意味する。

目的は宇宙の延命。その為ならば人命などを使い捨てる。

『キユウベえ』と名乗り、個体数は不明。感情は無く、人類の敵と言え「くどい。さっさとわたしを飛ばして」…

00009063——『マキナ』の要望を承認。『月』という地球の衛星に着陸した後、『マキナ』を日本の見滝原という地に転送する。

00009068——『月』に着陸。次いでマキナをテレポーターで転送する。

「てれ…なに?」

00000000——カウント3

00000000——3

00000000——2

00000000——1

00000000——0

00000000——いってらっしやい

「いってきます、パパ」

00009069——マキナの無事を確認。『地球』の観測を継続する。

「転送成功。位置情報不明。周辺情報を確認」

視界いっぱい広がる歪な空間。西洋の菓子で構成された地面や壁が崩れないのは明らかに常軌を逸している。

そんな不自然な空間に更なる不自然。

それは壁にリボンで拘束された、黒髪の少女。必死に拘束を解こうとしている少女は突然現れたマキナに気がついていない。

「ねえ、そのハサ…じゃないんだっけ、えと、人間、大丈夫？」

「っ…まさか一般人？こんな時に…」

声をかけられ、マキナに気がついた少女は驚いた後顔を顰める。

「ここは危険よ。すぐに帰りなさい」

身動きが取れない状態で注意する少女。だがそれを聞き入れず、拘束しているリボンに手をかざす。

「解析……完了。構成物質に未知の物質を確認。魔法と思われる。放置している所から一度きりの使い捨て、もしくは珍しくないものと推測」

「あなた何を！」

「さらに推測。先の発言、状況から目の前の人間は『魔法少女』であると思われる」

「あなた、まさか魔法少女？」

そんな馬鹿な、とでも言いたげな少女を無視してマキナは語り続ける。

「魔法少女と思われる人間、遠くから聞こえる戦闘音、断末魔、十代前半、つまりは少女の声から、ここは魔女の住まう空間、縄張りだと予測」

「ねえ、ちょっと」

「戦闘音から、戦っているのは一人で、単発式の銃を多数使い捨てる戦法を用いる、恐らく魔法少女と、巨体だが素早く、円柱状の生物らしきもの。これがおそらく魔女」

「あの一！」

「…なに？助けは必要？」

「…そうね、お願いしてもいいかしら」

少女は投げやり気味に言うと、マキナは少女を拘束しているリボン

を両手で掴み、引きちぎった。

拘束されていた少女は重力に従い落下するが、マキナに受け止められた。

「一応お礼を言っておくわ。ありがとう。」

それで、あなたが何者なのか、聞いてもいいのかしら」

マキナが地面に降ろしてすぐ、少女は何処からかハンドガンを取り出しマキナに向けた。

「マキナ。機械仕掛けの最終兵器。どうす・えくす・まきなの兵器と管理を担当してる」

「そんな冗談聞いていないのだけど。…っ、こんなことしてる暇ないんだった」

マキナの言葉に目を細めるが、そのすぐのこと。少女は突如消え去った。

「解析、推測。…空間転移…瞬間移動…時間停止？時間操作も可能かもしれない」

少女が消えた要因を解析すると、マキナは右手を鉄砲の形にして魔法がいる方向へと向けた。

「電圧上昇、電流減少、弾丸形状加工。電磁レール投射砲」  
マキナの指先から、マツハ10を超える弾丸が発射された。

地球では最新、近未来の兵器であるレールガンは、マキナの生まれた地では当然のように実用されている技術だった。

弾は菓子やコンクリートの壁を貫き、遅れて人ひとり分程度まで崩れ拡がる。

そこをマキナは、腕を降らず、跳ねる高さも最低限の人間には不向きな走り方で駆け抜ける。

「ティロ・ファイナーレ！」

巨大なマスケット銃を構えた金髪の少女の叫びと共に、大爆発が巻き起こる。煙が晴れると怪物は巨大な風穴を空けており、かと思え

ば、小さな黒い卵のようなものになって姿を消してしまった。

が、彼女の後ろに在った影が実体を持ち、円柱状の化け物が鋭い歯を覗かせて襲いかかっている。

「巴マミニ！」

怪物が襲いかかる寸前、その場に黒髪の、マキナの前から消えた少女がその場に現れた。

気配に気づいたのか、金髪が其方に振り向いたときには

既に腕だけの怪物との距離は――

「え？」

怪物を何かが貫いた。

その場の全員が、時が一瞬止まったと思いきや、怪物は爆散した。臓物や血肉を撒き散らし、近くにいた金髪の少女はそれをもろに浴びてしまう。

「キヤーー！」

「マミさん！」

全身を赤黒く染めた少女を心配してか、物陰から桃色の髪の少女と、水色の髪の少女が飛び出してきた。

「二人とも来ちゃダメー！」

マミと呼ばれた少女が大声で叫び、背後に銃を向けた。

銃の向く先にいるのは、指鉄砲を構えるマキナ。

マキナが時間操作をしたと推測した黒髪の少女はいつの間にかいなくなっていて、この場にはマキナと、マミと呼ばれた少女と、明らかに戦えない少女が二人。

「地球って、パパの寄越した情報よりずっと危険」

「あなたも魔法少女なのかしら、ひと足遅かったようね。でもまあ助けてくれたみたいだし、グリーンシードを一度使わせてあげるくらいなら構わないけれど」

マミが宝石のようなものに魔女が落とした黒い玉に棘のような装飾の着いたものを近づけると、黒いモヤのようなものが宝石から出て、玉に吸い込まれる。

その黒い玉、マミが『グリーンシード』と呼んだものをマキナに手



渡した。銃はそのままマキナに向けていて、警戒はやめていない。

「解析……構成物質不明、強度は装飾品と大差無し。負の感情エネルギーを察知。外観、エネルギーから未知の危険性を秘めている可能性がある。」

人間、これは何のためのもの?」

「あなた、魔法少女じゃないの?それとも、まさか知らない?いつの間にかキュウベえも居ないみたいだし」

「きゆうべえ、確か孵卵器の役割を持つ寄生虫」

「あなた何かと勘違いしてないかしら、キュウベえは私の友達よ?あんまり聞き分けが悪いようだ」と

友達を悪く言われたと思ったのか、マミはマキナを睨みつける。

「ロボット機械人形三原則、第一条。ロボット機械人形は人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない」

「何が言いたいのかしら?」

「私に交戦の意思はない」

「自分をロボットみたいに言うのね」

「事実だから」

「なら、ロボット三原則、第二条。ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。」

「だったかしら。あなたの目的を教えて欲しいのだけど」

「どうす・えくす・まきな目的は無差別な星の観測と治療」

「マミさんから離れろ!!」

突如、水色の髪の少女が鈍器を振り上げながらマキナに襲いかかってきた。

「ロボット機械人形三原則、第三条。ロボット機械人形は、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならぬ」

振り下ろされた鈍器を片手で掴み、奪い取るとマキナはその場から去っていった。

「あつ!ちよ、返しなさいよ!」

魔女の結界は消え、残された三人は現実に戻された。